

## ■伊福部昭／ヴァイオリン協奏曲第2番

「ゴジラ」の作曲家として幅広く、熱狂的なファンをもつ伊福部昭（1914-2006）だが、『管絃楽法』の著書もある彼の作品群の中で、とくに協奏曲には成功作が多い。たつぷりとG線で歌う長い独奏で始まるこの協奏曲はその一つ。自らヴァイオリンを演奏した作曲家らしく、楽器の特性を生かした音楽となっている。小林武史の委嘱で作曲され、翌年、小林が以前、コンサートマスターを務めていたチェコスロヴァキア国立ブルノ・フィルハーモニー（現・チェコ国立ブルノ・フィルハーモニー）で、ズデネツク・コシュラーの指揮のもと、小林の独奏で初演された。伊福部 64 歳の年の作品である。

単一楽章のラブソディックな音楽で、全体はテンポの変化する7つの部分からなり、最後に短い終結部が置かれている。レント・グランディオーソのテンポで「カデンツァのように」と記された最初のヴァイオリン独奏は、第4弦（G線）で演奏するよう指定されている。低音域の力強い響きで、ヴァイオリンがまるで物語を語りだすように奏を始め、パルスを刻むオーケストラの短い楽想を挟んで、しばらく一人語りのように独奏を続ける。再びオーケストラがパルスの楽想を奏でたのち、アレグロ・ヴィゴローソとなり、闊達な独奏が続く。やがてオーケストラも加わり、旋法によるメロディが連なり、民族色を色濃く感じさせる。短く挟まれた「ドシラミ・ドシラミ」というモチーフが「ゴジラ」の音楽を想起させる。アンダンテからアダージョ・エスプレッシブヴォとなり、ハーブの楽想がたおやかな雰囲気を加味した緩徐楽章風のリリックな部分となる。ふっと音調の変わるレントから独奏によるヴィルトゥオーソ的な素早い装飾楽句となり、次第にテンポを速めて、5拍子のアレグレットへと流れ込む。オスティナートにのせて、独奏が快活な雰囲気 of 楽想を小気味よく奏でる。ここで独奏ヴァイオリンがモノローグを繰り広げるが、これは冒頭のレントの順序を逆にした再現となっている。アレグロ・コーメ・ソープラでパルスを取り戻すと、前半のアレグロを再現しながら、プレストの終結部に向けて舞曲的な音楽で盛り上がっていく。

白石 美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。